

# 会計学の学び方

真鍋明裕

## 1. 会計学の特徴

会計学は、学習をすすめるうえでは、外国語と似たようなところがある。類似点としては、①初心者と経験者の差が激しい②独特の用語がたくさん出てきて、それを覚えなければならない③「文法」があり、各項目が規則正しく処理される、といった特徴を挙げることができる。それでは、上記の特徴それぞれについてみてみることにしよう。

まず①についてであるが、これは、新入生について言えば、商業高校の出身者とそれ以外の人との差ということになる。商業高校出身者は日商簿記3級～2級程度の知識を持っていることが多いが、それ以外の方は大学の授業で全く初めて会計学に触れるという場合がほとんどであろう。

このとき、初心者には「商業高校出身者がいる中で、自分はやっていけるのだろうか、授業についていけるのだろうか」という不安を抱く人もいるであろう。このことは、たとえば、アメリカで暮らした経験のある人がある程度の英語を話せるのに、自分はそういった経験もなく、全く話すことができない、という状態に似ている。しかし、これは純粋に経験の差にすぎないのであって、経験者に能力があり、未経験者に能力がないということではない。そして、経営学部で1年次に履修する「会計の基礎」は、「知識ゼロ」から出発することを念頭に講義が行われる。英語でいえば、ABC（アルファベット）から習うということである。「アルファベットが理解できない」という人はいないだろう。英語が話せる人もABCから出発したのである。

重要なのは、講義に毎回出席し、少しずつ知識を増やして理解していくことである。商業高校出身者には、したがって、大学で当初学ぶ会計学は易しすぎると思われる場合もあるかもしれない。しかし、基本的事項の確認は経験者といえども重要であるし、その確認のなかで意外な発見をすることも必ずあるはずである。

つぎに、②の特徴をみてみよう。会計とは、そもそも、会社（企業）の活動を、ある用語と金額に置き換えて表現するものである。こう言うと難しく聞こえるかもしれないが、同じようなことは私たちの家庭（家計）でも行われている。皆さん（または家族）は家計簿をつけていないだろうか。もしくは、つけた経験はないだろうか。そこでは、上記の「用語と金額への置き換え」が行われて

いるのである。たとえば、スーパーでキャベツを買ったとしたら、その金額は「食費」という項目に計上されるはずだ。郵便局で切手を買えば、それは「通信費」となるであろう。ここでは、日々の活動が、適切な用語（「食費」や「通信費」）によって表され、それが金額とともに記録されているのである。この点に関する限り、会社の会計も基本的に同じである。

したがって、重要なのは、日々の活動を表現する会計学独特の用語を知っていることである。これは面倒であるが、仕方がない。がんばって覚えることにしよう。英語も、全く単語を知らなければ話せない。やはりある程度の数の単語を知っている必要がある。しかし、英語と会計学とでは、覚えるべき用語の数はかなり異なる。英語では、筆者の経験上、たとえば大学受験には1,500~2,000語程度の単語を覚える必要があるが、会計学では、少なくとも初歩の段階では、多くて数十といったところだ。

つぎに③についてみてみよう。すでに述べたように、会計学では会社の活動を表現するための用語があり、それが金額とともに記録される。たとえば、簿記において、「銀行から現金100万円を借り入れた」という活動は、以下のように記録される。

(借) 現金 1,000,000 (貸) 借入金 1,000,000

ここで、(借) とか (貸) という表示はあまり気にしないでいただきたい。(左)、(右) と書いても同じようなものである。ちなみに、「借入金」は「かりいれきん」と読む。

上記の記録は、「銀行から現金100万円を借り入れた」という活動を会計の「文法」(ルール)に従って表現したものである。これは、誰がやってもこうなるし、これ以外の表現はありえない。同じことは英語についても言えるだろう。「私は彼が好きだ」は、I like him.となる。I like he.でもだめであるし、I him like.もおかしい。やはりI like him.しかありえない。したがって、英語を話せるためには、単語を覚えているだけではだめで、ある程度の文法(各単語がどの位置に、どんな形で配置されるか)は知っておく必要がある。会計学についても同じことが言える。

最後に、上記①~③に加えて、強調しておくべき点をあげておこう。それは、会計学も外国語も、「最初は取っつきにくいだが、根気よく学習を進めれば、誰でもできるようになる」という点である。外国語は、ある程度の単語と文法を覚え、実践練習を積み、一定のレベルで話せるようになる。これは、たとえ個人差があるとしても、誰にでも当てはまることであろう。会計学も同じである。用語と処理のルールを覚え、練習を積み、たとえば上記③でみたような処理(あるいはもっと複雑なものでも)は誰でもできるようになる。

## 2. 初心者が陥りやすい「ワナ」

前節でも述べたように、会計学は、外国語と同様、継続的に学習し、練習していれば、誰でもできるようになるという性質を持っている。しかし、初歩から始めるはずの「会計の基礎」においても、残念ながら試験で不合格となってしまう学生がいる。そうした人たちは、どこか、会計学の学

び方においてよくない点があったのではないかと思われる。初心者の「ワナ」にはまってしまったのだ。成果が出なかったとしたら、いったい、どこに問題点があったのであろうか。

第1のワナは、会計学の世界になかなかなじめないことである。会計学に関して、「難しそう」とか、「計算が面倒くさそう」などのイメージを持っていると、なかなかその世界を自分の中に取り込むことができない。これは会計学に限ったことではない。たとえば外国語も、それを異質な、自分とは違う世界の言語であると思っっている限り、上達することは難しいだろう。コンピュータだって、便利なものだから活用したい、と思わずに「マニアのやるものだ」といったとらえ方をしていると、使えるようにはならないだろう。まずは先入観を持たず、その世界に飛び込んでみる必要がある。それは、具体的には、用語や思考方法に慣れるということであろう。前節でも述べたことだが、まずは用語を覚えることがどうしても必要である。ここでつまづいてしまう人がいるが、それはもったいないことである。

第2のワナは、「木を見て森を見ず」になることである。つまり、全体的な理解が欠けた状態で個別の問題を考えてしまうのである。すでに述べたように、会計の処理は、一定のルールに従って、規則正しく行われる。規則正しいということは、どこかに変化が生じれば、それに対応して別のところにも変化が生じるということである。そしてそれが、会計によって描き出される会社の全体的な姿にも影響を与えるのである。ある項目と他の項目がどのように連動しているか、そしてそれが全体にどのような変化をもたらすのかについて、意識することが必要である。

第3のワナは、道具を甘く見ることである。たとえば、会計学を初歩から学ぶとき、簿記から入る場合が多いが、このときに欠かせない道具が電卓である。しかし、しっかりした電卓を最初から持っている人は少ない。したがって、簿記を学ぶためには電卓を購入しなければならない。ところが、購入が面倒なのか、それとも持ち運ぶことを嫌うのか、授業時に持参しない人も少なくない。気持ちはわからないではないが、これでは実践的な練習ができず、学習効果も上がらないことになる。電卓を授業に持参しないというのは、たとえて言えば、辞書なしで外国語の授業を受けるようなものである。つまり、それらは、いつも勉強の傍らに備えておくべきものなのである。道具をそろえ、それを活用することの重要性は、軽視すべきではない。

### 3. 会計学を理解しやすくするには

会計学の学習をより効果的なものにするためには、学習のさいにどのようなことに気をつければよいのであろうか。前節で述べた「ワナ」をふまえた上で、考えてみよう。

前節の第1のワナはどのようにすれば克服ないし軽減することができるのであろうか。方策の1つとして考えられるのは、「なるべく具体的に考える」ということであろう。会計とは、単なる抽象的な計算理論ではない。会計のとらえている世界は、あくまでも日々われわれが行っている具体的な活動である。企業は利益をあげるためにさまざまな活動をしているが、それは、われわれが朝起

きて、服を着替えて、食事をして、歯を磨いて・・・といった活動をしているのと同じである。皆さんは大学生であるから、企業の社員として勤めたり、企業を経営したり、といった経験はおそらくないであろう。だから、企業の活動について自己の体験に基づいて具体的なイメージをもつことはできないかもしれない。しかし、ここで想像力を働かせるのである。

たとえば、1. でとりあげた、「銀行から現金100万円を借り入れた」という活動を試してみよう。この活動ひとつをとってみても、色々なことを想像することができる。いくつか考えてみよう。

・「銀行から借り入れを行うということは、なにか目的があつてのことだろう。いったいどのような目的で100万円という現金を借り入れるのだろうか。」

・「借り入れた100万円で何かを買うのだとすれば、いったい何を買うのだろうか。」

・「100万円貸してくださいといっても、そうすんなり銀行は貸してくれるだろうか。銀行に予定どおり100万円を貸し出してもらうためには、きっと企業も努力をしているにちがいない。いったい、どのようなことをしているのだろうか。」

どうだろうか。他にも色々あるだろうが、このようなことを、たとえば自分がその企業の財務担当者になったつもりで、あるいは経営者になったつもりで考えてみるのである。企業が日々行っている数多くの取引について、その具体的な映像を頭の中に文字通り「描いて」みるのが理解の助けになるであろう。自分が実際に経験していないことであるが、「空想力」をはたらかせてイメージしてみることが有益である。

資格試験の合格を目標としてみることもよいであろう。これは上記とは別の意味で具体性が役に立つ例である。卒業に必要なだから、とか、何となく知っておいた方がよさそうだから、といった動機よりも、何か具体的な目標がある方が積極的に学習に取り組めそうである。大学で初めて会計に触れる人であれば、まず手始めに日商簿記3級の合格を目指してみたいだろうか。筆者が会計学の勉強を進展させていくことができたきっかけも、日商簿記3級の学習から、その面白さを感じたからである。3級に合格できたなら、次は2級に挑戦するとよい。これらは学習内容が大学の授業と重なる部分も多いので、自主的に勉強していれば、①授業を興味を持って聞くことができる②授業で自分の理解を確認できる③資格が手に入る、など良いことづくめである。

要するに、上記で述べたことは、会計を自分にとってなじみのない、異質なものと見るのではなく、会計を自分の中に取り込む、ということなのである。つまり、自分が会計にまつわる活動を実際に行っているつもりになってみたり、自分にとって有益なものとして簿記の資格に挑戦してみたりすることで、いつの間にか会計になじむことができ、会計を自分のものとするのであり得る。

では、第2のワナについてはどうであろうか。「木を見て森を見ず」にならないためには、森全体の風景を自分の中につねに描いていなければならない。たとえ1本の木であっても、その変化は、少しずつ森全体の風景に影響を与え、気がついてみればまったく様子が変わってしまうということもある。1本1本の木が伸びれば森全体も大きくなるし、紅葉すれば森全体の色も変わるのだからである。

われわれが会計においてふだん行っている1つ1つの処理を「木」とするなら、それを集成して作成される会計報告書は「森」である。最終的な報告書に与える影響を考えながら個々の処理を考えれば、その意味も理解しやすいであろう。

ある場所での変化が他の場所に与える影響を考えると、それらの「つながり」を理解しておくことが重要である。このことを、英語にたとえて見てみよう。「私はテニスをする。」は、英語では、I play tennis. となる。ここで、「私」が「彼」になると、He plays tennis. となる。主語がIからHeになれば、playがplaysになるのは、自動的なことである。つまり、主語の変化に連動して動詞が変化しているのである。さらにこれが過去のことであれば、He played tennis. となる。つまり、現在か過去かということと動詞の形は連動しているのである。ここにおいて、I play tennis. は、最終的に、He played tennis. となり、全体的な見た目もずいぶん変わったことになる。

会計も同じである。英語の各箇所が文法によって連動しているように、企業の1つ1つの活動は、かならず、会計を通じて、全体的な状態に影響を及ぼすのである。このような「部分」と「全体」のつながりを感じることができれば、会計の理解は進むことになるであろう。

最後に、第3のワナについてはどうであろうか。前節でも述べたとおり、学習を行ううえで、どのような道具を用いるかは、意外に重要である。なぜなら、道具は「学習環境」の1つだからである。ここで、「学習環境」とは、勉強をするときに皆さんに影響を与える諸条件のことをいう。たとえば、周りがるさい・静か、部屋が広い・せまい、時間が十分にとれる・とれない、などさまざまなものが考えられる。道具がそろっている・そろっていない、というのも、勉強の効果に影響を与えるので、学習環境の1つといえる。

どんなに能力が高く、意志が強い人でも、人間であるかぎり環境の影響を受けるものである。他の条件が同じであれば、やはり周りがるさいときよりも静かなときの方が、時間が十分にとれないときよりも十分にとれるときの方が、一般的に見て勉強の成果は上がりやすいといえるだろう。道具も同じである。たとえば、大きい画面で処理能力が高く、打ちやすいキーボードをそなえたパソコンを使ったときと、小さい画面で処理能力が低く、打ちにくいキーボードをそなえたパソコンを使ったときとでは、前者の方が作業の能率が上がることはいうまでもない。

会計学の勉強についても上記と同様のことがいえる。勉強の効果を高めるためには、よい本を選び、よい道具をそろえ、勉強しやすい状況を作ることが重要なのである。自分に合った教科書や参考書をじっくりと選び、電卓などの道具はなるべくよいものをそろえるのがよい。よいものをそろえるためには、多少の金銭的負担はあるが、それに見合うだけの効果はある。

#### 4. 授業での心得

会計学に限ったことではないが、授業を有効活用できるかどうかは、その科目の学習効果をきわ

めて大きく左右する。大学の授業は、通常、1コマあたり90分である。90分というのはなかなか長い時間である。内容のある学習ができれば多くのものを得ることができるが、その反面、欠席したり話を聞いていなかったりしたときの損失も大きい。せっかく時間をかけて通学するのだから、講義の時間が無駄にならないよう、内容を頭に入れ、また、後から勉強したときによくわかるようにノートをとるなどしておきたいところである。ここでは、会計学の授業をどのようにして受ければよいか、考えてみよう。なお、ここでは、新生がはじめて会計の授業を受けることを想定している。

まず第1に、精神的な面で、授業にどのような姿勢でのぞめばよいのかということを確認しておきたい。1. で述べたことを思い出そう。会計は、外国語と同様に、「最初は取っつきにくいだが、根気よく学習を進めれば、誰でもできるようになる」という特徴をもっている。会計の勉強を始める前に、まずはこのことをよく覚えておいていただきたい。この特徴は、2つの側面をもっている。1つは、「誰でもできるようになる」ということである。会計は、用語を覚え、仕組みを理解してしまえば、かならずできるようになるし、できるようになった人ができなくなるということはない。これは、練習すれば自転車に乗ることができるようになったり、手元を見ずにパソコンのキーボード入力ができるようになったりするのと同じである。「最終的には習得できる」というポジティブなイメージを持とう。ただし、習得できるのは、「根気よく学習を進めれば」という条件つきである。これがもう1つの側面である。つまり、会計は、「途中で脱落すると、それ以降がさっぱりわからなくなる」という特徴も持っているのである（他の分野でもそうかもしれないが、会計学ではこの特徴が顕著である）。その意味で、会計学は両極端の性質を持っているといえる。だから、授業には「絶対に途中であきらめない」という気持ちで臨んでいただきたい。これは抽象的なことなので、明確に意識している人は少ないと思うが、重要である。

第2に、授業を受けるさいの具体的な技術についてである。授業は先生による口頭での説明と、黒板（白板）への板書によって成り立っているから、それぞれに対して対処をする必要がある。では、どうすればよいのか。ここでも、外国語学習からの類推が有効である。つまり、外国語学習にとって効果的なことは、会計学の学習にとっても効果的であることが多いのである。

すでに述べたように、会計学と外国語との類似点は、独特の用語と文法があるということである。授業に出て話を聞いたりノートをとったりするときは、やみくもにすべてを聞いたり書いたりするのではなく、用語と文法に注目することにしよう。1. でも見たように、会計学では、日々ビジネスの世界で生じている出来事を、用語と金額に変換して把握している。ということは、逆に言えば、その用語と金額を見れば、何が起こったのかという出来事が想像できるようになっている。その用語のことを会計学では「勘定科目」という。先生の話や板書の中で勘定科目が出てきたら、その意味や、なぜそこで出てきたのか等について、授業中または授業後に書き留めるのがよいであろう。どれが勘定科目なのかがそもそも最初はわからないかもしれないが、これは覚えるしかない。この「単語の記憶」だけは乗り越えなければならないので、がんばってほしい。

また、3.でもみたように、会計には文法（計算ルール）があり、この文法によって色々な箇所がつながっている。ある部分の変化が、かならず他の部分にも変化を生じさせるのである。このような「変化の連動」の様子をとらえることが重要である。そのためには、視覚的な理解を意識したノート作りをするのがよいであろう。視覚的な理解をするということは、簡単に言えば「図（絵）を描いて理解する」ということである。足し算や引き算を学ぶときに、果物や人の数に置き換えて考えなかつたらどうか。それと同じである。会計では、会社の日々の活動が記録され、その結果は最終的には貸借対照表や損益計算書（これらの説明は省略する。それこそ、授業に出てよく聞いてほしい）といった報告書にまとめられる。まずはこれらの報告書がどのような部分から成り立っているか、ノートに図を描いて理解しよう。

上記のような報告書には、会社の日々の出来事が反映されている。ということは、新しい出来事が起これば、それは必ず最終的な報告書の「形」（かたち）に影響を及ぼす。先に述べたように、ある部分の変化は必ず他の部分の変化となって連動しているのであるから、その様子を図に描こう。このとき、筆者が勧めるのは、金額の大きさを正確に図に反映させることである。大きい金額は大きく（長く）描き、小さい金額は小さく（短く）描くのである。こうすれば、貸借対照表や損益計算書が、金額の増減によって「伸び縮み」する様子を表現できるだろう。

会計学の理解には、外国語と同様、単語と文法の理解が必要であると述べた。勘定科目（単語）を覚え、変化の連動のしかた（文法）を把握することを意識すれば、授業を有益なものにできるだろう。

## 5. 日常の勉強法

大学ではさまざまな授業科目をとるため、会計学だけに勉強時間の大部分を割り当てることはできないであろう。したがって、勉強時間やかけられる労力の点で限度があるのは理解できるが、それをふまえた上で推奨したいのが、会計学については、時間をかけてしっかり復習するということである。予習と復習であれば、復習をより重点的にしていただきたいというのが筆者の考えである。というのも、前節でも見たとおり、会計学には、「途中で脱落すると、それ以降がさっぱりわからなくなる」という特徴があるからである。会計学は両極端の性質をもっている。前回の授業までの内容がわかった上で次の授業を受けるのと、そうでないのでは、理解度の点でたいへん大きな違いが出てくる。この点を覚えておいていただきたい。

家庭での学習を考えたときに重要なのは、自分に合う、信頼できる教科書を1つでいいから見つけるということである。すでに見たように、会計学ではさまざまな用語や処理方法が出てくるが、そのすべてをつねに記憶した状態にいることは困難であろう。用語の意味について疑問を持ったり、取引の処理方法について確認したくなったりということが、日常の勉強ではかならず生じるはずである。このような場合に、まずこの教科書で調べてみようと思えるものを1冊、つねに傍らに置いて

ておこう。そして、外国語で、わからない単語に出会ったときに辞書を引くのと同様に、会計学でも、わからない用語や処理方法を見たら、教科書でそれを確認するのである。ただ読むのではなく、辞書のように疑問点を参照するという形で教科書を活用すれば、会計学への理解を効果的に高めることができるであろう。

また、これはとくに簿記に当てはまることであるが、問題練習を積むことは非常に重要である。問題練習を数多く行うことによって、基本的な用語や基本的な取引の処理方法には、いちいち考えなくても、いわば反射神経によって即座に対応できるようになる。この状態に早くなっておけば、加速度的にその後の理解が進むようになるであろう。